

世田谷・九条の会

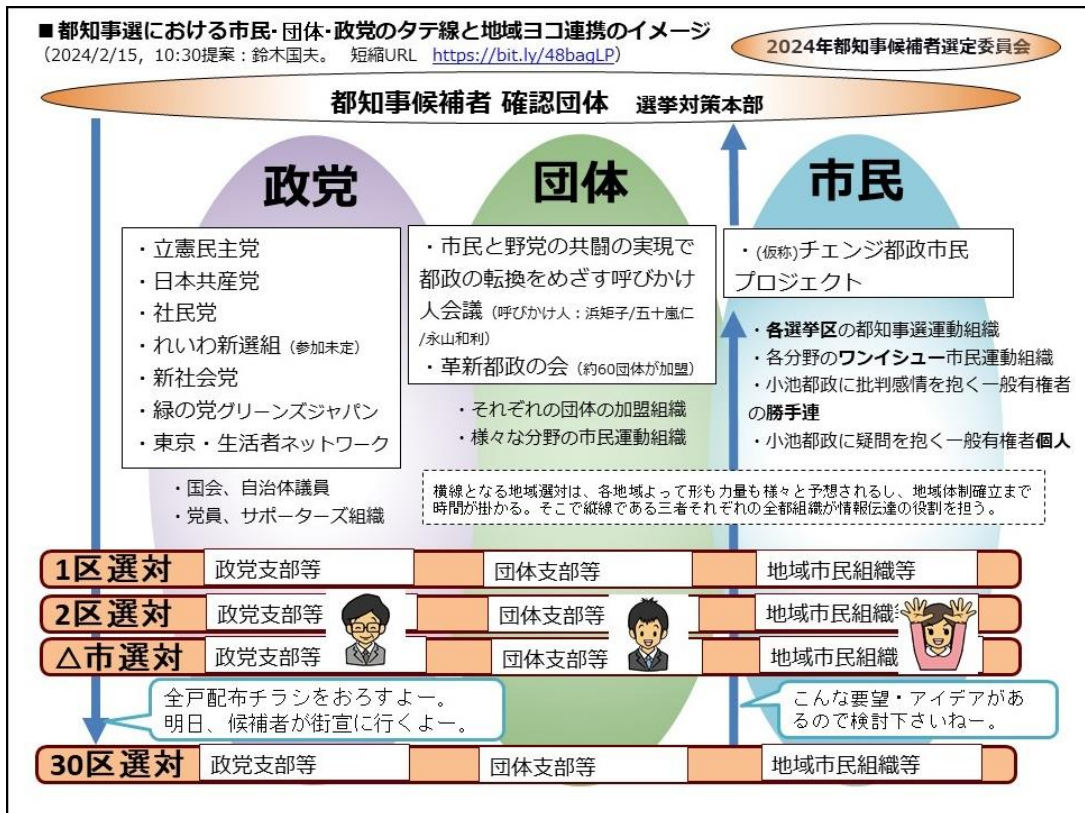
世田谷・九条の会
 ニュース No.72
 2024年2月28日発行
 (題字 西山簡石)

●事務局 〒154-0017 世田谷区世田谷 1-11-16 世田谷民商気付
 Tel: 03-6754-8666 Mail: setagaya9jyou@gmail.com
 ●ホームページ <https://setagaya9jyou.jimdofree.com/>
 ●郵便振替口座 記番号 00110-5-260741 世田谷・九条の会

史上初！2024 都知事候補は、市民、団体、政党の3者連携で出す

鈴木 国夫

3月8日に、政党・団体(革新都政の会等)・市民の3者が一同に会して「2024年都知事選候補者選定委員会」第1回会合が開催されました。この会合をよびかけたのは、前川喜平さん、宇都



宮健児さん、浜矩子さん、市民連合:福山真劫さん、菱山南帆子さんです。参加政党は、立憲、共産、社民、新社会、緑の党、生活者ネットの6政党(れいわにも呼び掛けをしている)です。総勢25名ほどの会合に、市民グループ代表として鈴木も参加致しました。

永らく、各党が別々に候補者を立て、都民の失望をかう時代がありました。今回3者で候補者選定を行うというのは、東京の「市民と野党の共闘」の積み重ねの成果であり、実に画期的なことです。小池都政をチェンジすることは容易なことではありませんが、6月20告示の都知事選は、5区・6区の市民選対で一緒に頑張れる体制が出来そうです。

(「市民連合 めぐる・せたがや」共同代表)

憲法と共に長生きしたい

池上 東湖

私は、今の憲法を勝手に親友とよんでいる。私の方が少し先輩で、つきあいは長い。

大学を出て、2年目を迎えた憲法会議の事務局に入り、9年間勤めた。その中で、1冊30円の〈憲法手帳〉を普及しながら、身近な生活から憲法を使っていくことが、改憲阻止の運動を支えることになることを学ばされた。

親友は、誕生から試練にさらされている。原因は、アメリカが戦後の支配を考えて、日本の古い支配層を温存したこと。国会提案時に、「国民主権」をあいまいにして提案したことをはじめ、アメリカ自身が朝鮮戦争前に改憲指示へ変換したことで、改憲の攻撃はずっと続いている。なぜ親友は試練に耐えられているか。

ひとつは国民のがんばり。

憲法の条文で一番弱い部分は、「地方自治」の章。それに息吹を与えたのは、京都府の蜷川虎三知事。庶民が要求を府政に届けるとき、議員を仲介するのではなく、府民が団体を作り、まとめて届ける原則をつらぬいた。教科書にも紹介された奥丹後の農村の女性たちが憲法を学び、声を上げて、川から水道をひいた話など、「住民が主人公」になっていく例を生み出した。府庁舎にかかけられた「憲法をくらしの中に」は、1970年代、東京や大阪などの民主的自治体へと広がっていった。そして「憲法をくらしの中に生かそう」というスローガンは、広く国民の中になじんでいった。



「一度残業を拒んだだけで解雇」など「工場の中には憲法は通用しない」状況が長く続いたが、ねばりづよい闘争で、現在は簡単に解雇できない。戦後 20 年経ったときでも、女性だけ「若年(30 歳など)停年制」、「結婚退職」がまかりとおっていたが、裁判闘争などで、ひとつひとつ克服していった。

もうひとつは国連を中心とした国際世論の動向。植民地から独立した国々が、自分たちの国づくりと重ねながら、「平和」、「人権」を中心課題とする国連の中で活躍し、新しい世界基準を打ち出している。「子どもの人権条約」は、学校内での教員による体罰にとどめをさし、今、「ジェンダー平等」は、国内制度の大きな見直しを迫っている。憲法にとっては追い風である。親友が国民の中でもっと輝くようすを見たい。そのため、私も少しでも長生きしたい。

(尾山台在住 元私立高校教員)



インボイス制度を考える

深澤 賢一

私は自家焙煎珈琲店を営んでいます。

はじめに、私は残念ながらコーヒー豆の卸業務もしている為、インボイスの登録をしてしまいました。

インボイス制度を止めるには、おおもとの消費税を正しく理解しないと話は進みません。多くの人が消費税を間違えて理解しています。そもそも消費税は預り金ではなく、価格の対価の一部。企業が生み出した付加価値に対して課税される付加価値税と裁判や財務省も確か国会で認めています。

付加価値とは、人件費、利息、利益などを加算した粗利益です。事業者が消費者から預かったお金ではありません。すなわち消費税は政府による値上げです。免税事業者は益税ではないのです。人件費も含まれる付加価値税だから、日本は消費税が導入されてから賃金が上がらないのですね！

分りにくく長い間騙されてきました。3%になった時から買い物のレシートに消費税が分けて印字されるのも、多くの国民を預り金と騙すその一環だと最近思います。30 年前もコーヒー店で働いていましたが、消費税が導入された時は、多くのお客様から便乗値上げ？と冗談めかしで言わ

れた事を最近思い出します。あの時から預り金説は始まっていたのです。

税金は財源でなく、増えすぎた時に間引いてインフレにならないように、経済を調整するものだと聞きました。

また消費税は、社会保障には一部しか使われておらず、法人税や一部の大金持ちの減税に充てられてきたそうではないですか。そして輸出している企業は、戻り税で消費税が上がると儲かるそうですね。また法人税は利益に課税されますが、消費税は赤字の事業者にも課せられるイジメ税です。そしてインボイス制度はさらに弱い事業者をタグ付けしてイジメを強くするとんでもない増税です。

私達庶民が元気になってお金の使わないと、経済なんてよくなるはずありませんよね！

10%になった時の軽減税率も何故新聞が対象になったのでしょうか。消費税の真実を報道させない為でしょうか。

私には2歳と9か月の2人の孫がいます。何故新聞が8%で、赤ちゃんのオムツが10%なのでしょう。おかしいですよ。地上波や新聞では消費税の真実が全く語られない現状です。

最近増税メガネ総理と言われ、支持率回復の為に減税話も出ているそうですが、法人税と富裕者所得税は簡単に減税出来るのに、何で消費税はできないのでしょうか。総理大臣が代わった所で、また同じような金太郎飴総理大臣になるのでしょうか。

私は、今の消費税反対と減税をうたえる議員さん達の声だけでは、消費税廃止は難しいと思います。何らかの方法で1人でも多くの有権者が消費税の真実に気づく事だと思います。

どうしたら真実を広められるのでしょうか。皆で考えませんか？

(奥沢在住)



沖縄だより

【海の向こうで】

岩村 利一

昔、戦争があった。海の向こうで。

2013 年の暮れ、私と妻は、妻の故郷である沖縄に東京世田谷から移住した。私はその数年前から、50 年以上住み慣れた東京を離れ、沖縄を終の土地と決めていた。そんな折、世田谷で開催されたある九条の会の催しに参加した際、『海の向こうで戦争があった』という言葉を目にしたとき、何とも言えぬ「違和感」を妻と共に感じた。

太平洋戦争において、本土では、米軍機による空襲や、艦砲射撃による砲弾の嵐が降り注ぎ、原爆が投下された。そして、「本土」防衛という錦の御旗の下、最後の砦となった沖縄では、本土ではなかった凄惨な地上戦という、地獄の苦しみと無慈悲な殺戮と破壊により、想像を絶する悲劇が引き起こされた。

戦争終結後の沖縄は、戦勝国の米軍の占領統治下に入り、本土で施行された日本国憲法で守られず、自由と民主主義、人権尊重を標榜する米国に守られるはずもなく、沖縄は占領地であるが故の米国軍人による無法地帯と化し、加害当事者には何ら制裁が科されることもなく、泣き寝入りの被害と悲劇が尽きることなく続発した。海の向こうで。

そして今、日本に沖縄の施政権が返還されて 50 年以上が経過した沖縄では、宜野湾市街地の中心にあって世界一危険と宣伝される普天間飛行場を、名護市辺野古に移設する問題で、危険除去を掲げて移設を強行する国と、新基地建設を阻止する県が法廷で争い、最高裁で県が敗訴し、国が行政代執行を実施する事態となった。司法・行政・立法は、国家権力側になびき、国の安全保障と専権事項の前では、日本国憲法で保証され、地方自治法で権利が守られ、主張できるはずの地方自治体の一つである沖縄の声は、ことごとく排除排斥された。日本の人口の 1%程度の沖縄県民の声は潰された。

翁長雄志氏(前沖縄県知事・故人)は、2015 年 9 月 21 日、スイス・ジュネーブで開催された国連人権理事会総会で、国際世論に問いかけた。『沖縄は日本ですか？』

これは同時に、本土への問いかけでもある。沖縄では、いまだに「本土」、「内地」と口にする人がいる。では、本土から見た沖縄は、いったいどこに位置付けられているのか？ 沖縄は沖縄であって、海の向こう。それは、事実としての地理的な遠さにとどまらず、その言葉を発する心までも、遠い海の向こうのこと。

現実社会の中で、世界では様々な悲劇が起きている。ウクライナで、パレスチナで。それらを他人事とせず、自分事として捉え行動している本土の人々がいる。しかし、沖縄で起きていることについてはどうか？ 「沖縄の問題大変ですね」、「平和のため頑張ってください」。共感ではない、無意識の同情。もちろん、沖縄に思いを寄せる人々は本土にもいる。しかしそれは絶対的少数で、今の日本が抱える問題、課題はあまりにも多く、全てに対処することはできない。

たとえ厳しい現実があろうと、本土に頼り切らず、今の沖縄で、精一杯生き、力強く声を上げ続けている人々がいる。踏まれても、起き上がり、押しつぶされても、立ち上がる人々がいる。それが、沖縄の生き方かも知れない。負けず、くじけず、諦めず、笑顔を忘れずに、生きている人々がいる。海の向こうで。
(沖縄県在住)



【付記】 左の写真は、偶然にも辺野古の漁港で遭遇した「ヤドカリの引越しの最中」の写真です。

私と妻は、2015年2月から2019年10月まで、毎週1回(当初は土曜、その後日曜担当)、那覇の県庁前にある県民広場から辺野古に向かう、通称“辺野古バス”のご案内係を務めていました。2016年6月はじめの辺野古バスで、何人かの座り込み参加者を引き連れて、ゲート前から下の浜に降りたとき、偶然にも見つけたものがこれです。惜しむらくは、動画ではないこと…。

初めは、散らばっていたヤドカリが、いつの間にか、何とはなしに一か所を目指して集まり始め、やがて、写真の形になりました。再び、惜しむらくは、浜からゲート前に戻らなければならず、その後の最後までを見

ることができなかつたことです。一体全体何が起きているのやら、皆目見当つかず、ただただ珍しい写真が撮れた、と喜んでいました。

そして、辺野古バスからの帰宅後、やはり気になっていたのも、ネットで検索して調べたところ、何と、英国BBCの科学ドキュメンタリーで、まさに私が辺野古の浜で見かけたものと同じ映像が流れていました。そこでようやく、「ヤドカリの引越し」であることが判明し、納得できました。

写真の中央を見ていただくと、見えにくいですが、一番大きな貝があります。そこに、次に大きな貝を背負ったヤドカリが取り付いて、その次には順々に、貝が大きい順に取り付いています。体育の時間で、大きい順に並んでの要領です。少し脱線しますが、運動会で「お楽しみ競技」にしたなら、面白いでしょうね。そして、大きいものから順番に貝を脱ぎ、目の前の大きな貝に引越す。次から次へと。短時間で全員が引越してでき、とても合理的で、かつ効率的。しかも、一匹での作業ではなく、大きな塊になっているので、陸からも空からも、外敵に襲われる危険度は低く、身の安全も図っている。自然って素晴らしい！と思いました。神様、ありがとう！

このヤドカリの引越しは、辺野古を訪れる皆さん、とくに子どもたちは興味を引かれるようです。小さくなった貝から這い出して、目の前の大きな貝に入り込む。それを順繰りに繰り返すヤドカリたちの引越しは、子供たちの想像力を大いに掻き立てます。そんな自然の巧みさ、愛しさを守ることが、どれほど大切かを、これからも語り続けて行きたいと思います。

辺野古の自然の中で、そんな素晴らしく、懸命に生きている生き物たちをないがしろにし、小さな命さえ守ろうとしない、守れない人たちに、はたして人の命が守れるのだろうか？そんな思い入れのある、辺野古での一枚の写真です。



令和6年能登半島地震と、彼ら

宮本 友介

二〇二四年一月、僕は北陸に向かっていました。三年前より取材をしている集落へ、雪が降り積る集落の様子を撮影する為に。仕事仲間が運転するバンには、僕ら撮影隊三名分の着替えや、お世話になっている集落の皆へのお土産、撮影機材一式、そしてブルーシート、生理用品、2 ケース分のインスタント食品を積んでいた。ほんの二週間前に震災に見舞われた皆に渡すものだった。

幸いにして彼らの集落は、被害はほとんどなかったけれど、普段日用品を購入する店は集落から車で四十分以上かかる山の麓にあり、そしてそのいずれの店舗も、何もかもが不足していた。

僕らが集落を訪れる際は、撮影機材を運搬する都合、東京からおよそ九時間の道のりを車で移動する。見知った北陸自動車道の海沿いは、雪の吹き荒ぶ午前三時過ぎでも、工事車両や救援物資を満載したトラックのテールライトが、能登に向かう能越自動車道へ明滅していた。

僕は助手席でぼんやりと車列を眺めながら、昨年末に別の取材で訪れた七尾の港と、そこで出会った人々のことを考え続けていた。

震災以来連絡が一切取れなくなった彼らと、本来ならばとくに記事にできていたであろう、終戦直後に七尾の港で起こった米軍機雷事故の構成について。七尾で出会った皆は、あの静かな港でかつて起こった悲劇が取り上げられることを一様に喜んでくださっていた。必ず映像と文字とで記事にすると誓った。その約束は果たせるのだろうか。ある人には果たせるかもしれない。金輪際果たせない人もいるかもしれない。こめかみが妙に熱くなり、真っ白に結露している助手席側の窓ガラスに額を当てて、少し眠った。

取材先の利賀村坂上地区へ入ったのは、陽が上り切った頃だった。集落へ入る山道の法面が崩れていないことに安堵して、僕らが訪れる度に住まいを提供くださる区長の家を停めて、勝手知ったるで玄関に入り、僕らは彼と抱き合った。

「俺らは元気やっちゃ」と、北陸のイントネーションで彼は笑った。

夕刻、気の置けない地区の皆が彼の家集まり、鍋を囲んで痛飲をした。酩酊した彼らは、元日僕がヒステリックにかけてきた安否確認の電話の声色を真似て囁す。そしてそれから僕らはやっぱり互いに抱き合った。



撮影は翌日。3メートルも積もった雪と、真っ白に透き通る地区を撮影して回る。カメラのファインダーを覗き、どうか彼らと、彼らにとって大切な誰やにとって、雪が天上から幸となって降り注ぐようにと祈りながら。

(事務局、桜丘・経堂九条の会)

コラム パレスチナ問題の原点はどこにあるか

それまでアラブ系農民が平穏に暮らしていたパレスチナの地に、第二次世界大戦後 80 万人のユダヤ教徒が入植し、1948 年には米欧列強の支援のもとイスラエル国を建国しました。以来、その国の人口は急激に増加し、いまでは 10 倍以上 950 万人に膨れ上がっています。もともとそこに住んでいたパレスチナ人と呼ばれる人々は行き場を失い、ガザ地区とヨルダン川西岸に追いやられてしまいました。とくにガザ地区では一方は海、もう一方は高い壁に囲まれ、そこに住む人は自由に入出入りすることもできない「天井のない監獄」と呼ばれる空間に閉じ込められています。シオニズムという思想を抱くユダヤ教徒らは、パレスチナこそは神が彼らに約束した地であると称してここにユダヤ教徒の祖国を建設し、これでヨーロッパにはびこる反ユダヤ主義に対抗することができると言いました。しかしこの国家によって追い立てられた先住の民は抗議の声をあげ抵抗しました。いまやこの国家は四方を敵意と憎しみによって囲まれ、反抗するものを閉じ込める壁が作られました。

ところが壁にはかならず両面があります。閉じ込めたつものの側がじつは閉じ込められていると見ることもできます。ヨーロッパの中世都市にはかつてユダヤ教徒だけが住むことのできる区画があり、ときにはそれは壁で囲まれていました。このような区画はゲッターと呼ばれました。ここでも壁は一方でユダヤ教徒をそこに閉じ込めると同時に、彼らの身を守る役目をも果たしていました。いまイスラエルという国家はユダヤ教徒が壁のなかで暮らすいわば、世界のなかにつくられたゲッターなのではないかと言う人もいます。壁のなかで暮らす、それはアメリカ合衆国やブラジルなどに見られる門と壁で囲まれた富裕層の住むゲイテッド・コミュニティを思い起こさせます。差別の顕著な現れである反ユダヤ主義に対抗するために生まれたシオニズムは、結果として新たな差別の構造を作り出してしまったと言わなければなりません。今こそ原点に立ち返り、差別とどう向き合うかという視点からイスラエルとパレスチナとの問題を考えることが必要なのではないのでしょうか。



(下村由一 千葉大学名誉教授)

昨年末、世田谷の九条の会に関わり、永年にわたって支援いただいた3人の方の訃報に接しました。今年2024年は、九条の会が発足して20年、世田谷・九条の会が作られて19年目となります。憲法の平和主義を守るために力を尽くしてこられたお三方に感謝申し上げるとともに、その志を絶えさせることなく引き継いで参りたいと思います。親しくされていた方から追悼のことばをいただきましたので紹介します。

楠見宏義さんを悼む

上田 定男

昨年11月15日、楠見宏義さんが大動脈解離のために急逝しました。葬儀は家族葬だったため、お通夜に区労連から西村さんと私が参列致しました。享年85才でした。

都教組世田谷支部委員長退任後、酒井弘道さんの次の区労連議長を務めました。その後は、皆さんご存じのように地域の労働運動、革新懇や原水協をはじめとした平和運動の先頭に立って



大活躍をされました。私は都教組世田谷支部や区労連などで40年近くも楠見さんと共に活動してきました。また、都教組本部の執行委員(専従)を下りて、現場に戻られた時に東深沢中で2年間ご一緒し、同僚でもありました。楠見さんの背中を見ながら、言葉を聞きながら、多くを学ばせてもらいました。まさに人生の師といえるような方でした。

楠見さんが都教組世田谷支部の支部長で、私は一執行委員でした。初代委員長の

酒井さんは節くれ立った大きな手で皆さんによくお茶を入れていました。楠見さんは、事務所のゴミ出しに気配りをしていました。30数年前に再建された頃の、都教組世田谷支部のこんな情景が次々浮かんできます。楠見さんは、機関会議成功の秘訣は「会議の中身で成功させること。次にもう一回来なくなるような会議の持ち方の工夫が大事」と、よく言っていました。英語の先生らしく(?)、会議の初めに「『ブレインストーミング』からやるか」と言っていました。執行委員会が本当に楽しかったです。

私が楠見さんに初めてお会いしたのは、40代でした。更にもっと以前に(20代かな?)同僚だった用務主事のNさんは、東深沢中の主事室で、「それは、それはカッコ良かったわ。まるでジョー

ジ・チャキリスみたいだったんです。」東深沢中では、2人しか組合員がいませんでした。時々、自由が丘の居酒屋で「分会会議」を行いました。翌年、1人、組合員を増やしました。私の転勤後、組合員が楠見さん一人になってしまうと、すぐに転勤してきた人を増やしました。

楠見さんのお別れ会を準備している中で、「楠見先生の『朝の手紙』の教育実践は、忘れられません。」というメールを頂きました。「世田谷革新懇のニュースにいつも青年のインタビューを載せていたね」「(三上満さんみたいに)頼まれれば、何でも快く引き受けてくれた人だった。」など、思い出が語られています。コロナ前に平野さん、コロナ中に酒井さん、コロナ後に楠見さんの大先輩たちに会えなくなったのが、ホントに悔しいです。

楠見さんのご冥福をお祈りいたします。

(世田谷区労連議長)

鈴木瑞穂さんを悼んで (2023年11月19日逝去 享年96歳)

劇団銅鑼 佐久 博美

今でも電話をすれば「やあ元気かい」とあの声で出られるのではという気がしてなりません。

生前はよくご自宅に伺いました。ここ何年かは満州で過ごされた幼少期から海軍兵学校、敗戦、



平和憲法と演劇との出会い、民藝入団、銅鑼創立、その後と、歩んでこられた道程を回想されることが多かった。抜群の記憶力が呼び戻す折々のエピソードを美声と振る舞いで臨場感たっぷりに再現されるのです。

きまって涙声になるのは若い命を落としていった海軍兵学校の同窓生たちの思い出と、学校のあった江田島から目撃した原爆を振り返るときでした。終戦がもう少し遅かったら僕はここに居ない。生き残ってしまった罪悪感も消えることはありませんでした。

10キロ先の広島市上空で炸裂した新型爆弾のキノコ雲の色を語り始めると時間が止まります。江田島の海は流れ着いた無数の遺体で埋まりました。その光景と漂う異臭は体から離れないと言います。

敗戦直後は死ぬことばかり考えていた元軍国少年を変えたのは新憲法とチェーホフでした。この二つの衝撃的な出会いがその後の生き方を決定づけました。「憲法は愛情に満ち、演劇は人間存在を肯定する芸術」でした。「生きる」と鼓舞された気がしたそうです。

最期まで反動政治と改憲策動を批判し憂いておられた瑞穂さん。見事に生き抜かれた鈴木瑞穂という 96 年の舞台は、非戦による平和を希求する止まない意志と、演劇で培われた深い人間愛に彩られていました。 (写真撮影 西山正浩)

暉峻衆三氏のこと (2023 年 12 月 22 日逝去 享年 99 歳 代沢九条の会会員)



暉峻衆三さんは学徒兵(伍長)として原爆投下後の広島に配属され、広島の惨状を目の当たりにされました。暉峻さんは当時の体験と胸の内を『NHK 戦争証言アーカイブス』(2016 年)のインタビューで率直に語っています。亡くなる 3 か月前(9 月 3 日)のズーム例会では、ビデオを見た後にうかがった暉峻さんのお話をとおして現場での臭気を含め、当時の広島状況や人々の想いがリアルに感じられ、大変印象に残っています。

ご自宅をお尋ねすると、暉峻さんは、『安倍(のち、岸田)はひどいよ、どうなっちゃうんだろうねえ』『僕なんて IT についていけないよ』と嘆きつつもメールやズーム、テレビのニュースで外と交わり、『60 代 70 代は人生の華だよ、九条の会、頑張ってくださいよ』といつも励まして下さいました。訪問介護を受けての一人暮らしを貫き、身体の不調を多々抱えながらも寝たきりになることなく、静かに永眠なさったとのことでした。

暉峻さんは暉峻義等氏(医師・初代倉敷労働科学研究所所長)のご次男で、復学後、農業経済学研究的の道を歩み、戦後、日本の農村構造や食糧自給の仕組みがいかに破壊されたかを農村の現地調査に基づいて論じるなど、多くの論文を発表し、また提言されています。『わが農業問題研究の軌跡～資本主義から社会主義への模索』(2013、お茶の水書房)と題する自伝的書にあらましをまとめられています。ご冥福をお祈りいたします。

(代沢九条の会 松田 こずえ)

私の趣味(1) ハイキングの勧め

赤松 熊雄

高齢になると、夜中に目を覚ますことがよくあり、寝つきも悪くなります。日中に体力を消耗すると、寝つきがよくなるようです。私のハイキングは多くが高尾山で、山ヒルの出ない寒い季節には丹沢山系にも登ります。また、夏には涼しさを求めて、標高の高い山、2千 m 以上の山にも行きます。身体に負担をかけないように、ロープウエイなど、文明の利器を利用してですが、木曾駒ヶ岳、谷川岳、那須、西穂高岳、北横岳など、また、車で標高2千メートルまで行ける麦草峠から登る高見石、そこから下って、白駒の池に寄って帰宅する、などがあります。

山は空気が綺麗で、深呼吸をすると、体が軽くなる気分になります。景色も良く、都会では見られない植物が沢山あります。高尾山のような低い山でも春に行けば花が、秋は紅葉が、夏に高い山へ行けば高山植物の花を見ることができます。まずは、高尾山から始めてはいかがでしょうか。登り方はゆっくり歩くことです。息切れしないように歩くことが肝心です。登り始めは体力がありますから、平地と同じ速さで歩くことが出来ますが、暫くすると、息が上がって苦しくなります。そうすると、5 分も歩かないうちに、再度息が上げて、休みたくなります。やがて休むことが多くなり、苦しさだけが残って周りの美しい景色も目に入らなくなります。登り始めは特にゆっくり歩くことです。ゆっくり歩いて、30分歩いては5分休んで、また30分歩くこと、苦しくならない速さで歩くことです。書店や図書館には、山の歩き方に関する本が沢山ありますので、参考にして下さい。

昨年8月上旬の暑い時期に、上高地から3時間ほどの横尾まで歩きましたが、登山道は大きな樹木が多く、また、冷たい水の梓川や沢(川と言えない水の流れ)の水の影響か？空気が冷たく、このコースではほとんど汗をかかずに歩くことができました。途中の徳澤ロッジに宿泊しましたが、朝7時ごろの外気温は19度ほどでした。もちろん途中には東京近郊では見られない花や樹木が沢山あり、目を楽しませてくれました。

真冬の高尾山では、頂上付近にシモバシラという氷の花を見ることが出来ます(右写真)。これはシモバシラという草が枯れた状態に土中の水分が伝って凍りついて白くなったものです。これは20センチにも満たない小さいものですが、雪の芸術品のように見えます。このように、東京近郊でも、花や自然現象を見ることができ、新鮮な空気を胸いっぱい吸うことができますので、楽しみながら健康な身体作りができます。



(事務局 祖師谷在住)

【当面の行動予定】

3月24日(日) 世田谷区民集会&パレード 午前10時半～ 若林公園
10時～ プレコンサート。 自前のゼッケン、プラカード、賑やかな音の出るもの
をご用意ください。楽しく賑やかなパレードにしたいと考えています。

【編集後記】

- ☆ 1月1日元旦の夕刻、能登半島を震源とする M=7.6 の大地震が発生し、原発のある志賀町と半島北部の輪島市で震度7を記録、7万棟近くの建物が損壊したほか、珠洲市では大津波、輪島市では火災が発生し、災害関連死を含めて240人を超える犠牲者が出ました。断水、停電が長期にわたり、1ヶ月後になっても1万5千人が避難を余儀なくされています。被災された方々に心からお見舞い申し上げます。災害列島とも言われるわが国では、国民の安心・安全を守る上で、防災・減災は第一の課題です。この国の政府は、義援金・支援金・ボランティアといった国民の自発的応援に依存しすぎてはいないでしょうか。
 - ☆ 子育て・教育、医療福祉・介護、生活保護では、予算不足を理由に削減や増税をちらつかせる一方、膨れあがる辺野古新基地建設や防衛費、万博の会場建設・運営費には、惜しげも無く追加予算をつぎ込み大盤振舞いです。連日国会で追及されているように、自民党の金まみれの腐敗も極限に達しています。今こそおかしな政権にレッドカードを！
- 
- ☆ 1月16日のボロ市、2月10日の梅まつり宣伝は、多くの参加者を得て、たくさんのちらしを配布し、「大軍拡反対」の署名を集めることができました。宣伝の様子は、ホームページで紹介していますので、ぜひご覧下さい。<https://setagaya9jyou.jimdofree.com/>です。
 - ☆ 「俳句コーナー」はしばらくお休み。今号から「私の趣味」コーナーを新設しました。読者の皆様のご寄稿をお待ちしています。生活を豊かにする趣味をご紹介します。
 - ☆ 大切なお知らせです。日本郵便は、秋に郵便料金の大幅な値上げを予定しています。郵送費等物価の高騰は本会の財政を直撃しています。そこで、メールアドレスをお持ちの方には、メール(カラー版)でお届けして、紙代と郵送費の節減を図りたいと考えています。趣旨に賛同いただける方は、setagaya9jyou@gmail.com (事務局)にメールをお送り下さい。ご協力をよろしくお願いします。また、紙での配送を希望される方は連絡いただければ、従来通りお届けします。